

地域病院へ薬剤師派遣

土曜診療や救急 柔軟に対応

大分大より良い医療を提供

大分大学病院薬剤部(伊東弘樹教授)は、薬剤師が不足している竹田市久住町の大久保病院(犀川哲典院長)に薬剤師の派遣を始めた。薬剤師は病院や薬局が直接雇用しており、派遣制度は全国でも新しい取り組みという。最新情報が集まる大学病院と地域に根差した病院の連携を進めることで、より良い医療を提供できるよつになると期待されている。

ようにするため、犀川院長が大学病院に要請して8月から受け入れを始めた。

大学病院の伊東教授と佐藤雄己副部長が出向いて、処方箋の審査や調剤業務、院内の医療安全や感染予防など院内全体の管理システムを指導する他、院内講演で薬の使い方を説明する啓発活動をしている。

大久保病院は竹田医師会病院と協力して、来年度から入院が必要な重症の患者を24時間・365日受け入れる「二次救急医療体制」を再開する。さまざまな疾患に迅速に対処するには、医療関係者同士のチーム力向上が重要。管理システムなど大学病院のノウハウを身に付ければ薬剤師だけでなく、職員全体の意識改革にもつながる。

医療法では入院患者70人に1人の薬剤師の配置を定めている。大久保病院(140床)の薬剤師は常勤が1人で、非常勤の薬剤師が処方箋の審査や調剤に当たっていた。土曜診療や救急などにも柔軟に対応できる



医療安全や感染予防などについても話し合う(左から)大分大学病院薬剤部の伊東弘樹教授、佐藤雄己副部長、大久保病院の田中望洋薬剤師

後は若手も派遣し、地域医療を学ぶ機会にしたいと話した。

医師は大学病院や大規模な基幹病院に所属して地域の病院や診療所に派遣されたり、症例研究をしたりすることで交流がある。一方、薬剤師は病院や薬局ごとに採用されるため、派遣制度はなく、就職すると他施設との交流が減り、情報交換の機会が少なくなるという。派遣を通して交流が増えることで、県内の薬剤師のレベルアップにもなると期待されている。

(小田原大周)

薬剤師は医師の処方箋が適切か審査したり、薬の調剤、複数の薬を服用する患者の服薬指導などをを行う。複数の疾患がある高齢者のケアを多職種連携で行う在宅医療では、迅速に副作用などを判断し、対応する必要があると求めている。